鹿の谷事件の位置づけ

四十回生　黒岩ユカ

序

安元三年六月一日、鹿の谷の陰謀と呼ばれる平家打倒計画が発覚する。陰謀参加者全員が捕らえられるまで約四日、首謀者である西光と藤原成親は即処罰という電光石火のようなすばやい処置がとられた。当時の資料である九条兼実の日記『玉葉』や兼実の弟慈円著『愚管抄』では簡単にしか記されていないが、『平家物語』は巻一の後半から巻三の半ばまでの大部分をこの事件関係の記述にあてている。蜂起前に発覚しすぐに片が付いてしまった事件、しかも詳細さえはっきりとはわからなかったものを、『平家物語』はなぜ約二巻にも及ぶほど大きくとり上げたのだろうか。

『平家物語』は歴史そのものではなく、歴史をもとにして作られた物語なのである。そのために作者の意図によって様々な虚構が加えられている。ここでは事件に関係した主な人々の人物像に注目し、それがどのような想定のもとに造型されていったのかについて述べていきたい。そして鹿の谷事件が物語全体の中でどのような位置におかれているか見てみたいと思う。

ここで中心として扱うのは覚一本『平家物語』である。

第一章　事件関係者の人物像

第一節　平清盛

清盛は『平家物語』の作者が最も力を入れて造型した人物と言っていい。そしてその人物造型の基本となっているのは悪行者としての存在である。ここで言う「悪行」とは王法や仏法に対する反逆的行為のことである。しかし『平家物語』での清盛は相当に偏った描かれ方をしていると言えよう。なぜなら平家政権を築き上げたのも清盛でありながらそこまでの過程に関してはほとんど触れられず、政権を握ってからの姿だけが対象となっている。また、絶頂期

にある平家一門がおごり高ぶっていたことが窺えはするものの、実際に悪事をはたらいた者は清盛以外にそれほど見当たらない。平時忠の「此一門にあらざらむ人は皆人非人なるべし」と言う文句、平資盛が藤原基房に無礼をはたらいたこと、平重衡が三井寺を焼き払ったことなどが簡単に記されているだけである。以上から作者が清盛を悪行の代表者に仕立てていることがわかる。特に資盛の「殿下乗合」事件では資盛の行為よりもその後に清盛のとった報復行為の方を詳しく述べて「これこそ平家の悪行のはじめなれ」と評している。このように『平家物語』においては清盛こそが平家の悪行であり、平家滅亡の原因となっているのである。

「殿下乗合」で平家への侮辱に対し厳しい報復を見せた清盛は、鹿の谷の陰謀の発覚で再び平家の反抗者へ制裁を加えようとする。「殿下乗合」事件が平家の悪行のはじめなら、鹿の谷事件は第二の平家つまりは清盛の悪行と言えよう。ここでは清盛の対応が様々に詳しく描かれる。この場面で清盛は大きく二通りの人物像を表している。陰謀を企てた者に対する人物像と息子重盛に対する人物像である。

清盛は敵となる者に対しては断固たる厳しい態度で臨む。西光や藤原成親への尋問の場でそのような面が描かれている。西光には成り上がり者としてその過分の官職や振舞いを激しく非難する。西光に逆襲されるとすぐには殺さずに拷問を加え、それでも飽き足らずに口まで裂いてしまう。西光とは反対に成親は下手に出ているが、成親に対しても清盛は容赦のない処罰を加える。物語の中での清盛の悪行はすべて平家繁栄の維持とつながっており、清盛の悪者性は平家の敵と対決する時に発揮されている。この後の治承三年の後白河法皇幽閉、その翌年の源頼政と以仁王の討伐も重大な事件であったはずだが、そこでは清盛の様子についてはほとんど記されていない。しかし鹿の谷事件での西光と成親との対決の場面では清盛は怒りの様相で書き綴られ、その激怒の様子が詳細に述べられる。清盛の悪行は数多く出てくるが、鹿の谷事件での行動はその中心をなしているといえよう。反平家計画の首謀者二人と直接対面したこの事件で、清盛はその悪者像を確立しているのである。

鹿の谷事件で清盛は敵に対しては厳しい強烈性を発揮しているが、同じ場面で重盛に対しては違った一面を見せている。これは重盛の人物像とともに見ていきたい。

第二節　平重盛

重盛は「清水寺炎上」で初登場するが、この場面から清盛と対比されて描かれている。そして既にここから思慮深く、王法や仏法の守護者であり、清盛さえ一目置いている

という人物像が造られている。清盛と重盛の違いは続いて先ほど述べた「殿下乗合」事件でも映し出される。こうして二人の人物像の違いが叙々に述べられていくが、その差を決定的に描いたのが鹿の谷事件である。ここで清盛が悪者ぶりを最高に発揮するのと同様に、重盛も徳行の人としての本領を最も発揮する。その中心が「小教訓」から「烽火之沙汰」にかけての三つの章段である。

「小教訓」は成親の助命を願う内容である。重盛が成親を救おうとするのは二人の家族が多くの婚姻関係を結んでいたことが大きな理由と考えられるが、重盛は助命を頼むにあたってそのことが理由ではないとする。そして後白河法皇の寵臣である成親を殺害することは尊皇に反することや死罪をとり行って最後には自分自身にそれが返ってきた信西の例などを挙げ、それを助命の理由とする。事件関係者の助命を願う人物としてもう一人、清盛の弟教盛がいる。教盛は娘婿で成親の嫡子の成経を自分に預けるよう清盛に頼むのだが、娘かわいさをその理由とし、肉親の情に訴えている。親戚の助命嘆願でさえも王法や儒教を軸として述べる重盛は物語の中でも特別な人物であり、これは重盛のみが持つ大きな特色となっている。

成親の処罰をめぐっての対決の後、今度は法皇の処分に関して再び清盛と重盛は対決する。この時の重盛の諫言が「教訓状」「烽火之沙汰」である。この諫言の他に類を見ない異常な長さと様々な宗教的思想の詰まった内容、そして諸本でほとんど変動がないことなどから、重盛像を描くにあたって作者が最も力を入れた場所、つまりは作者の意見そのものであり当時の貴族的な考え方であったと思われる。ここで重盛は王法や儒教の倫理により君臣の秩序を守るべきだと述べて清盛の悪心を責める。清盛と親子であるが故の苦悩も述べられているのだが、成親の助命嘆願の時と同様それは愛情によるものではなく、孝という儒教的倫理に基づくものとなっている。そして孝よりは忠の方を選ぶという重盛の行動に対し法皇や世間の人々は惜しみない賞賛を与え、作者は「上古にも末代にもありがたかりし大臣也」と絶賛する。作者の意見、思想を背負わされた重盛はこうして完璧な人物として造型された。このような理想的人物として描かれる重盛と対比される時清盛はどう表わされているか。法皇幽閉を思いとどまらせるために重盛がやって来ると清盛はあわてて腹巻の上に法衣をつけ、その間からのぞく胸板の金物を隠そうとしきりに胸元を引き合わせるような滑稽さを見せる。また、重盛が兵を召集すると自分を討つのではないかとあわてる。「清水寺炎上」の場面もそうであるが、重盛と対決する場面での清盛には西光や也親に対して見せた強烈な悪者ぶりとは全く違った別

の一面が浮かび上がってくるのである。重盛の君子性を強調させるために生じた清盛像であろうが、重盛に力を入れたあまり清盛の人物像に矛盾が生じている。しかしこのような滑稽さが悪者清盛に人間的な一面を与えていると言えよう。

史実では鹿の谷事件で清盛が法皇を幽閉しようとした形跡はない。従って法皇幽閉に関する重盛の諫言や行動も虚構ということになる。作者はこの事件の法皇の立場を利用して自分の代弁者としての重盛像をここに置いたのである。

第三節　西光

『平家物語』において清盛が悪者として造型されていることは既に述べた。しかし鹿の谷事件の関係者で悪者とされている人物がもう一人いる。首謀者の一人、西光法師である。

西光は登場する場面のすべてで良く描かれてはいないが、彼の最大の悪行は天台座主明雲の配流に関する讒言である。まず、西光の息子達が加賀で寺社に対し乱暴な振舞いをして、それが山門を巻き込んだ騒ぎとなる。騒ぎの様子を記す「俊寛沙汰・鵜川軍」から「一行阿闍梨之沙汰」までは院庁と山門の対立を描いて鹿の谷事件に関する本筋からは離れているのだが、その中にも西光一族の運命の伏線が敷かれている。それは騒ぎをおこした山門に対する責任追求の結果として明雲が処罰されるところにある。物語は明雲配流を西光父子の讒言によるものと断定したばかりでなく、配流になった明雲を山門の大衆が奪い返した時には西光がさらに山門への厳重な処罰を要求したとしている。そこで

身の只今亡びんずるをもかへりみず、山王大師の神慮にもはゞからずかやうに申て宸禁をなやまし奉る（巻二「西光被斬」）

と述べてこの直後の陰謀発覚による西光の運命を暗示している。西光一族の滅亡を

あやまたぬ天台座主流罪に申おこなひ、果報やつきにけむ、山王大師の神罰冥罰をたちどころにかうぶ[11]て、かかる目にあへりけり（巻二「西光被斬」）

こう締めくくっているところからも、作者が西光の破滅の原因としてのこの明雲事件をいかに重要としているかが読みとれる。実はこの明雲とは清盛の出家の戒師をつとめたりして平家と親しい関係にあった人物なのである。しかし物語には明雲と平家の関係は一切記していない。清盛が明雲の処罰をとりなそうとしたと簡単に書かれているだけである。そして明雲は「無雙の碩徳、天下第一の高僧」と評され、同情を込めて述べられる。このことがいっそう西光

の悪者性を強めている。明雲事件を機として西光は神仏の怒りを受けるべき人物となってしまう。この当時強大な力を持っていた山門と院庁は対立関係にありこの事件もその一端であったのだろうが、そのような歴史的背景は除き西光の悪行としてとりあげている。王法や仏法を重んじる『平家物語』としては、西光の破滅は神仏の罰によるものでなくてはならなかったのだろう。

陰謀が発覚して、西光は捕らえられて清盛の面前に引き出される。今や政治の実権を握る平家一門の最高権力者清盛と、後白河法皇第一の寵臣として権勢を誇った西光との、二人の悪者の対決がここに設定される。清盛と西光の対立は西光が登場する時から既に考えられていた。「清水寺炎上」や「鹿谷」での西光の平家への悪口は他の者と比べても大胆で恐ろしいものである。たとえ平家であろうと臆しないという大胆不敵な性格がここに表われており、これが清盛との対決の場へとつながっていく。むしろ清盛と対決するために豪胆な人物とされたと言っていいかもしれない。二人の対決はまず清盛が西光の官職が身分不相応だと責める。清盛の攻撃に対し西光は、自分の出世は先例があるが清盛の出世は先例にないことをあげて堂々と反論する。どうも清盛は西光を見下していたようだが、その西光に「お前こそ成り上がり者だ」と言い切られて清盛が激怒するのは当然と言えよう。その結果清盛は西光に拷問を加え、口を裂いたあげく首を切る。この残酷な処罰は清盛のプライドを傷つけたためであり、西光の豪胆さが清盛の激しい怒りを引き出したことになる。そして清盛に反抗する西光もその不敵さが強調される。互いの強烈性が相手の強烈性を引き出し、読者に印象づける場面である。二人を対決させることによって互いの悪者像を際立たせている。

しかし悪者という点で比較すると、西光は法皇の庇護があってこそ悪行ができるのであって、法皇を押しのけようとするほどの清盛の悪行には及ばない。最後は清盛に惨殺される。西光は清盛をののしれるほどの剛者そして悪者として造型されながら、結局は清盛の悪者性に圧倒されてしまっている。

第四節　藤原成親

鹿の谷事件の中心人物として殺害されたのは西光、そして藤原成親である。

滅びへの道をたどる他の者達と同様、成親もまたおごれる人であった。そのおごりのあまり左大将の地位を熱望するが、そうした官位への執着が成親を滅ぼすことになる。成親は任官成就のために邪法ともいうべき拏吉尼の法を上賀茂神社の境内でおこなわせ、神を怒らせてしまうのであ

る。成親の破滅もやはり神仏の罰なのである。成親の官位への執着は平家に任官を妨げられることによって平家への恨みへと転化し、これが陰謀の発端となる。

陰謀が発覚して清盛に詰問される時、成親は自分に関係のないことだと主張する。西光の白状文を見せられた後も重盛に助命を乞う。見方によってはいさぎよいともとれる西光と比べて卑怯な人物と見られないこともない。しかしそれでも成親は悪者としては造られていない。成親には清盛と口論できるほどの度胸はなく、下手に出て言い逃れをはかる。だが、西光や行網の白状という証拠があるうえに、成親は平治の乱でも反平家の側について処刑されるのをかろうじて免れた人物である。つまり平家にとっては再犯者になる。清盛の怒りは簡単にはおさまらない。抵抗のない成親を庭に引き落とし、しめあげてわめかせよと命令する。成親があまりに弱々しく描かれていることもあって、この場面では清盛の激しさや残酷さの方が強調されてしまっている。清盛の悪者ぶりが強すぎるために成親を悪者としてとらえにくくなっているのである。

成親が悪者となれない理由はもう一つある。それは成経を中心とする家族との、互いを思い合う叙述が数多くあることである。陰謀などの首謀者が処罰されるのはいわば当然のことであるのだが、そこに家族の愛情が絡んでくると悲劇へと変わってしまう。成親も陰謀発覚以前は驕慢な人物として悪しざまに描かれながら、北の方や子供達の登場によって悲劇の人となってしまった。もっとも成親の配流の途中に成親も山門と事を構えたことがあって大衆から呪咀を受けたという説話が挿入され、彼の悲惨な境遇はあくまで自分自身が招いた神仏による罰なのだとしている。しかし「大納言流罪」での配流の道行文、「大納言死去」での忠臣信俊との対面、北の方や子供達の嘆き、「阿古屋之松」「少將都帰」での成経の父への思慕、このような成親説話とも呼ばれる章段には哀れさが漂っている。作者は成親に同情をよせているとは言えないが、引き裂かれた家族の悲哀を絡めて成親を悲劇の人として描いている。

第五節　俊寛

『平家物語』の中の俊寛の凄絶な運命は有名である。しかし俊寛の悲劇的末路がどこまで史実であったのかははっきりとわかっていない。ただ、島で死んだことだけは事実であろうと思われる程度である。

俊寛の悲劇は中宮（建礼門院）の懐妊に端を発する。重盛はこれを機として清盛に鬼界が島の流人達の赦免を申請する。清盛は康頼と成経の赦免は認めたが俊寛だけは許そうとしない。しかし清盛が俊寛を許さない理由を見ると少々

疑問点があるようである。まず俊寛は自分が口添えをしてやって一人前になった者だと言っているが、物語の中にそのような記述はどこにも見当たらない。また陰謀の密議が俊寛の山荘でおこなわれたことだが、これは『愚管抄』では静憲法師の山荘となっている。以上から考えるとこうした理由は俊寛を島に残すために作者がいれたものと思われる。俊寛一人が島で没した史実と合わせるために、どうしても俊寛が許されるわけにはいかなかったのである。しかしこれらは表向きの理由として設定されたのであって、物語は最大の原因を信仰の差に求めている。西光、成親の死が神仏の罰とされている以上、陰謀関係者で死んだもう一人の人物、はるかに離れた孤島で生涯を終えた俊寛の死も神仏に関係ありとされてもおかしくない。そして俊寛と同じ処罰を受けながら赦免された成経、康頼の生還も神仏に関わってくることになった。そのために三人の運命の岐路が熊野権現への信仰の差となり、俊寛は「天性不信第一の人」とされたのだろう。

島に置き去りにされた俊寛は尋ねて来た有王にその後の家族の消息を教えられる。物語では俊寛の家族は妻と娘、幼くして死んだ息子の三人である。しかし『尊卑分脈』を見ると俊寛には成人した息子俊玄と二人の娘がおり、『平家物語』と一致しない。そうすると『平家物語』での俊寛の家族構成は、俊寛の悲劇を強調するための虚構であろうと思われる。島に残されて後の境遇も悲惨極まりないものであったが、都に残してきた家族の状況が伝えられることで俊寛の悲劇性が強まっている。

この鬼界が島説話は前半の康頼に関する熊野信仰、後半の有王にまつわる高野聖の話と宗教的色彩が濃い。また俊寛の最期は諸本によって異なる。そのため発生源について諸説があり、おそらく別のところで誕生した説話だったのが『平家物語』に結合されたのだと考えられる。この説話の誕生になり、平家のために無残な死を迎えたもう一人の人間の姿が浮かび上がってくることになったのである。

第二章　平家滅亡への伏線

鹿の谷事件に関連した記事は俊寛の死によって一応終結する。陰謀参加者三人の、計画発覚後の運命を中心にして話が進められてきた。その中には平家滅亡への様々な伏線が見られる。

まず、事件の最後を「か様に人の思歎きのつもりぬる平家の末こそおそろしけれ」と結んでいることが注目される。章段の構成を見ると「僧都死去」の次に短い「風聞」、そして「医師問答」の重盛の死が続く。『平家物語』では「風聞」において旋風が吹き荒れたのは治承三年五月十二日として

いるが、当時の文献『玉葉』『山槐記』『明月記』などではすべて治承四年四月二十九日し記されている。史実をまげて治承三年の五月としたことで、この旋風に何らかの意図を含ませていることは明白である。これは重盛死去の前兆なのである。重盛の死は治承三年七月二十九日であり、その前に置かれたこの旋風の記事は俊寛の死と重盛の死を結びつける役割を果たしている。清盛の嫡男として平家一門をこれから支えるべき人物であり、貴族側の評判もよかった重盛の死はいうまでもなく平家にとって大きな損失であった。清盛に諫言ができる人物がいなくなったことで清盛の悪行は一層ひどくなっていく。こうして重盛の死は平家滅亡への第一歩とされるのである。物語では「僧都死去」の結びの一文と重盛の死を「颱」でつなげることで、平家転落の始まりに鹿の谷事件で殺された人々の怨念の影を出している。「僧都死去」と続いているために俊寛の恨みが強く感じられるが、「人の思歎き」の「人」が俊寛の家族のみをさしているとは言えまい。西光の口を裂かせたこと、成親の死に最も無残な殺され方を選んだこと、俊寛の鬼界が島での悲業の死などという史実に見当たらない処罰を書き加えたのは、平家に対しての恨みの募りやすい死に方をさせるようにしたためとも考えられる。最期が悲惨であればあるほど平家への恨みが深くなるのは当然となる。三人の死はもともとは神仏の罰によるものなのだが、実際には清盛によって与えられたために平家への怨念が生じることになるのである。

恨みを残して死んだ者が怨霊となって祟りをなすという思想は平安時代に浸透していったようである。冷泉院とその皇子達に祟った藤原元方や雷神となったとされる菅原道真がその代表的なものであったが、『平家物語』でも「赦文」において元方の例や早良親王、井上内親王をあげて怨霊の恐ろしさを述べている。そして治承二年（一一七八）の中宮御産によって一旦鬼界が島から離れた話を俊寛へと戻す前にも「頼豪」の章段を入れて再び怨霊について触れている。中宮の御産の折には霊をなだめるために讃岐院に崇徳院の院号を、宇治の悪左府頼長には太政大臣一位を贈ったとあるが、『玉葉』や『愚管抄』ではこのことは安元三年（一一七七）七月二十九日の条に記してある。同様に三井寺の阿闍梨頼豪の死は応徳元年（一〇八四）で、頼豪がとり殺したとされる敦文親王は承保四年（一〇七七）に亡くなっているから史実と合っていない。

これらを見ると鹿の谷事件に関連してあつかわれる怨霊についての話には史実とくい違う点が多い。史実を変えてまで、しかも二箇所にわたって怨霊話を挿入していることから、やはり西光、成親、俊寛達の悲業の最期を平家滅亡

と関連づけていると見るべきであろう。

怨霊にまつわる話の他に、清盛が法皇に対する完全な反逆者となってしまうことも平家滅亡の伏線の一つである。

理想的人物であった重盛は清盛と法皇の仲を保っていた。その重盛の死を契機に清盛と法皇の対立は激化する。これまでは清盛は朝敵になるのを恐れて法皇を怒らせるようなことが出来なかった。しかし鹿の谷事件によって法皇が平家を倒そうしていることを知る。そして重盛の死後、法皇が反平家の態度を明らかにした。重盛の知行国であった越前国を没収した。欠員となった中納言の地位に清盛の推す藤原基通ではなくわずか八才の藤原師家を任命する。この時は既に高倉天皇と中宮との間に皇太子が生まれており、清盛は次の天皇の外祖父の地位を得ている。こうして重盛の死から四か月後、清盛によっていわゆる治承三年のクーデターがおこされるのである。

クーデターをおこす前に清盛は「法印問答」の中で法皇への不満を並べているが、その一つに鹿の谷の陰謀に法皇が関係していたことが出てくる。事件当時は重盛の諫言によって法皇に手を出すことは控えたものの、清盛の法皇に対する不信はこの事件から積もっていったと設定されている。だからこそここで再びとりあげられているのだろう。鹿の谷事件の物語は「僧都死去」で一応終了しているのだが、それによって生じた法皇と清盛との対立は後々まで続くのである。つまり鹿の谷事件は法皇から清盛を切り放したきっかけとされている。法皇が平家に敵意を見せた以上清盛も法皇へ配慮をする必要が消えたわけである。治承三年末には既に重盛もこの世になく、清盛はついに法皇を鳥羽殿へ幽閉してしまった。しかし法皇を見捨てることは王法に対する反逆へとつながる。法皇、先の天皇を幽閉することなどまさに王法を侵害する最大の悪行である。清盛はこの行為によって必然的に王法の神々の怒りをかうことになるわけである。『平家物語』は重盛の次に好意的に描いている静憲法師にこのように言わせて平家の運命を予言する。

「何事も限りあることで候へば、平家たのしみさかへて廿餘年、され共悪行法に過て、既に亡び候なんず。…しかれば政務は君の御代となり、凶徒は水の泡ときえうせ候べし。」（巻三「法皇被流」）

成親達の悲劇的な最期がおごりをきわめたあまりに下された神仏の罰としてくり返し述べられていることを考えると、神罰を受ける身となった清盛と平家一門の末路がどうなっていくか容易に想像できるだろう。

こうして事件と平家滅亡とが関連づけられている。鹿の谷事件の首謀者達の末路を詳しく語っていくことは、平家

のこれからの運命を暗示する役割もはいっているのである。

結論

こうして見てくると『平家物語』の鹿の谷事件はいかに虚構が多いかがわかる。歴史的には、鹿の谷事件は法皇を中心とする貴族と平家を代表とする武士の政権争いであった。この時は実行力にまさる平家が圧勝する。しかし未然に防がれはしたものの、この事件は平家に対する貴族達の不満が限界に達していたことを世間に示すこととなった。この反平家の機運の高まりを契機として次に源頼政と以仁王が、そしてやがて諸国の源氏が蜂起する。この事件は平家打倒の引き金としての役割を果たすことになったのである。鹿の谷事件は本来はもっと複雑な政治的意味を含んだ事件であった。おそらく真の首謀者は後白河法皇であったろう。『平家物語』ではそのような政治的色彩は一切除いて関係者の個人的感情の面から描いている。法皇は物語の中で重要な位置をしめながらその存在感が薄いが、それは法皇が高きものと考えられていたので作者が触れるのをできる限り避けたためと思われる。

鹿の谷事件の終焉と同時に再び動乱の時代となり、やがて源平の戦いに突入していく。その中で多くの敗者達がまた生まれ、悲劇の運命をたどることになる。冒頭で語られ物語全体をつらぬく「盛者必衰のことはり」の理念は、鹿の谷事件の成親の破滅の始まりにおいて初めて「盛者必衰の理は目前にこそ顯れけれ」と使われる。成親の姿にこれから敗者となる者達の面影を映し出しているのである。成親が中心とされてはいるが、この事件で処罰された人々すべてが敗者の運命を表わしていることは容易にわかるだろう。敗者は本人だけでなく家族をも巻き込んで悲劇へと発展していく。成親や俊寛も驕慢な人物とされながら、家族が登場する場面ではお互いを思う情愛が強く描かれていた。陰謀の首謀者達の運命はこれから繰りひろげられる源平の戦いによって生まれてくる敗者達の運命そのものなのである。鹿の谷事件は関係者の人物像やその者達の末路を一人一人詳しく作っていったことにより、『平家物語』全体の縮図となっていると言えよう。

首謀者の悲劇がくり返して語られることは神仏の罰を受けた者の姿を強調しているが、それと同時に平家滅亡の伏線を含むことによって平家に虐げられた人々の姿の代表ともなっている。清盛の悪者像を西光や成親との対決によって際立たせたのは、平家没落の第一歩である重盛の死を招いた清盛の悪行の数々をこの事件に象徴させるためと考えられる。そして清盛の悪行を強めるとともに重盛の人物像の中心もこの場面にもってきて二人の対比を明らかにして

いる。

『平家物語』は平家を中心とした敗者の姿を主な主題としており、この事件は主題を最初に提示する場面となっている。『平家物語』において鹿の谷事件は物語の、つまりは平家滅亡の幕を開く導入部としてとりあげられているのである。